

式 辞

学び舎の桜はこの数年入学式には葉桜でしたが、今年はこの日までは花を咲かせたまま待ってくれました。新生活の開始を祝うこの佳き日に、埼玉県立伊奈学園総合高等学校第39回入学式を挙行できますことは、本校にとってこの上ない喜びであり、心よりお礼申し上げます。

先ほど入学を許可しました796名の新入生諸君、入学おめでとうございます。

諸君はこの場に、真新しい制服を身に着け、新鮮な面持ちで立ち会っていますが、その目の前には3年間の時間と多様な学習機会、友人との出会いが待ち受けています。どのような3年間になるのか、したいのか、期待と不安に満ちた緊張を感じていることと推察します。

保護者の皆様におかれましては、本日お子様が晴れの入学式を迎えられましたことを、本校職員を代表いたし、心よりお慶び申し上げます。

さて、アイザック・ニュートンは万有引力や微分積分法の発見で有名です。物理学、天文学をはじめとした近代科学技術の発展は、ニュートンなしには考えられないほどの、大きな功績を残しました。

そのようなニュートンは1676年、友人の科学者ロバート・フックに宛てた手紙に、「私が彼方を見渡せたのだとしたら、それは巨人の肩の上に乗っていたからです」と認めました。諸君の入学にあたり、私はこのことを考察したいと思います。

「巨人の肩に乗る」という表現は、実はさらに500年さかのぼった12世紀、シャルトルのベルナールにも、ギリシャ神話のオリオンにも見受けられることから西洋の慣用表現なのだと思います。

およそ学問をすることは、有史以来、様々な文明にわたって、先人が嘗々と積み重ねてきた知の体系の上に、新たな発見を加えることです。この新たな発見は、ささやかなものであってもよい。知の体系を踏まえていること、その上に積み上げられることこそが重要、「巨人の肩に乗る」とは、学問の発展を象徴した表現なのだと思います。

一方、学問と、車の両輪をなすのは、経済や政治、技術開発といった実学でしょうか。学問だけではおなかを膨れない、生活を豊かに、便利に安全にできない。その意味で、実学も不可欠です。学問と実学は反発合いません。ともに補い合い、触発し合い発展してきました。

新型コロナウイルスとの戦いは、とうとう3年めに突入しましたが、ウイルスや感染メカニズムの分析、さらにワクチンや新薬の開発は、まさに学問と実学の恩恵に浴していると言えましょう。

現在、ウクライナが大変な状況にあることを、諸君も胸を痛めながら注視していることと思います。国際社会はこれに対処するために、参戦こそしていませんが、経済制裁、武器供与などの策を講じています。当事者から見れば、手ぬるいと感じるでしょうが、実学は具体的に策を講じ、進めます。一方学問はどうでしょうか。実学のような具体性、即効性は、学問に期待できません。

ビスマルクは「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」と言いました。学問は歴史を紐解き、国家の在り方や統治の仕組み、国際秩序の枠組みを探究します。これは100後、200年後を見据え、進むべき方向を指し示す営みです。

手ぬるいと感じこそすれ、学問的探究を無駄だと断じる人はいないはずです。

「変化の激しい社会」という言葉は、十年以上前から繰り返されていますが、新型コロナ、ウクライ

ナをはじめとした政情不安、急激に進むデジタルトランスフォーメーションと、近年ほど変化の激しさを痛感する時代はありません。

そうした時代にあっても、知の体系を受け継ぐことはおろそかにできない、いえ、そうした時代だからこそ、知の体系をしっかり受け継ぐことが求められます。諸君が伊奈学園に入学するとは、自らが知の体系の継承者になること、肝銘すべきはここにあるのです。

保護者の皆様には、これまで慈しみ育まれた子育てに、心より敬意を表します。これからは本校教職員も参画し、お子様の健やかな成長に、全力で取り組んでまいります。

時にはご家庭と学校との間で見解の相違等があるかもしれませんが、かような場合であっても、本校教職員は、保護者の皆様と、願いを共にする立場として、良好な関係構築と連携強化に努めてまいります。ご不明の点は、ご遠慮なく学校へお寄せくださり、ご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

結びに、新入生諸君が実り多い高校生活を過ごすこと、そして、どのような困難に直面しようとも、仲間と英知を集め、果敢に立ち向かう気高さとしなやかさを研ぎ澄ますことを願い、式辞といたします。

令和4年4月8日

埼玉県立伊奈学園総合高等学校長 浅賀 敏行